

---

# 漆黒の騎士と白衣の天使

reki

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

漆黒の騎士と白衣の天使

### 【Nコード】

N7208Y

### 【作者名】

r e k i

### 【あらすじ】

自分の生涯を思うがままに生き、世界の在り方を変えた漆黒の騎士。  
そんな彼の傍らには常に一人の白衣の天使がいた…？

白衣の天使マジ天使！

そんな、かなりお馬鹿でちょっぴりシリアスな剣と魔法と戦争な物語。

## 第0話へプロローグ

旧暦1877年

ヴァイス王国のとある貴族の家に一人の男が誕生した。

名を”ルイフェン”ヨジエワール”

後世に名を残す”漆黒の騎士”その人である。

何故、千を優に越す罪を重ねた大罪人が王に忠誠を尽くす騎士と呼ばれたのか。

何故、彼は皇国を壊滅的な危機に陥れても尚、破格の英雄と呼ばれたのか。

何故、黒き悪魔と罵れ呪われた忌み子と蔑まれた彼に付き従う者が数万人もいたのか。

何故、何故、何故。

彼の死後数百年を経った今も疑問は尽きないだろう。

私は彼の子孫として彼の研究に生涯を費やしてきた。

それでも尚、疑問は尽きない。

その最もたる存在がルイシェンに付き従ってきた人々の筆頭たる女性にして、自らを”白衣の天使”と称する奇跡の変人、サクラ”サカモト”である。

彼女の出自は全くもって不明であり、その能力、言動は他に類がないほど特殊なものであった。

一説には異世界人という説もあるが、それが一番彼女を言い表して

いる言葉とも思えてくる程である。  
神秘的な黒髪黒眼で何を指して白衣の天使などと宣っていたのかは不明であり、治療と称して愛用していた細剣で病人の腹を切り裂いたという記述まである。

私は彼らの子孫として、彼らの謎を解き明かし、明確なる真実をいつの日か記す事を此処に誓う。

皇国暦526年 12月31日

アシクヨジエワール

## 第1話

――  
――

どこだルイシエン！

屋敷内には居ないようです！

くそつ、あの馬鹿…今度は我が家に伝わる宝剣を持って行きやがった！

――――  
――――

「ふん、なあにが宝剣だよ。こんな無駄に裝飾ばかりされたナマクラ」

そう呟いて彼は馴染みの商人の家に入る。

この少年、家からコッソリ金目の物を盗んでは売りつけているのである。

「おやおや、今度は何を盗ってきたんだい？ルイシエン坊や」

商人の方もそんな事はお見通しのようで毎回からかってはいるが、実際に彼が持つてくる物は利になるので、結局買い取っている―所

謂共犯者である。

「坊やは止めてくれよ、それより今回は良いものを持ってきたんだ。期待してるぜ？」

そう言つて一振りの剣を手渡すルイシエン。

13歳の冬の日であつた。

\*\*\*\*\*

結局のところ、剣は買い取つて貰えなかつた。

なんでも時の皇帝が我が国の国王に下賜し、更にそれをウチの御先祖様に下賜した物で世界に一振りしかない超貴重な物、らしい。

その貴重さ故に、すぐに露見してしまう可能性が高いのだ。

「なあにが世界に一振りだ。俺の、そこらの盗賊から奪つたこの剣だつて世界に一振りだつつの。第一、…」

そんな大事なモン、ウチなんか譲るなよ王様。

仕方ないので腰に佩して都をぶらりと散策する。

屋敷に帰れば罵倒が待っているだけだ。

ここ最近は何目かの物を盗む時しか帰っていない。

母が病気で死んでから、ずっとこんな調子だった。

家を出て、悪友共と武装して馬を駆り、敵対している賊とやらを潰し吸収し、武具、馬等を奪い根城へ帰る。

根城に帰れば酒、賭博、女の毎日だ。

だが、それでも父の統治するこの都の人々からの支持はかなりのものだった。

なんせ、俺達の行いが都の治安を守っているようなものなのだから。俺は自分の家からは盗むが他人の物は盗まない。ただし、敵対していなければの話だが。

今の世は腐っている。

王族、貴族共は民から高い税を絞り尽くし帝国へ賄賂を送り官職を金で買い、更に権力を上げて金を絞る。

賊をもって賊を潰す。そして乱をもって乱を制す。それが俺だ。

いつの日か、今の腐敗仕切った王族、貴族を叩き潰してやる。

例え、それが唯一の肉親、父―ゼラード―ヨジェワールを殺す事になろうとも。

「俺のやるべき事は、変わりはない」

## 第2話

彼、ルイシェン「ヨジエワールは何故ここまでひねくれてしまったのだろうか。」

\*\*\*\*\*

「ルイ、俺ら、あの餓狼旅団に睨まれてるらしいぞ?」

悪友達の一人、ライズが切り出した。

俺が立ち上げた、この名も無き一賊結成以来の古参幹部の一人であり、弓の達人でもあり、若干14歳の割には頭もそこそ良い。俺と年も近く兄弟同然に育ってきたので気心も知れている。因みに字が読めるのは幹部の最低条件である。

「餓狼旅団：なかやかデカイ獲物が掛かったじゃねえか。ライズ、幹部を収集して軍議だ！それと、野郎共に久々に派手な戦を始めつから、酒と女を絶つように伝えておくんだ」

「了解した!」

餓狼旅団とは総勢4500人を越える山賊の一大勢力である。グランレーヴェル帝国が統べるこの大陸は大まかに分けて五つの大



国で成り立っている。

まず中央には実質的な大陸の支配者が居座る、グランレーヴェル帝  
国領がある。

北西の国、イリシエン。

北東の国、サイリウス。

南西の国、アンリツタ。

南東の国、ウルエチア。

我が国は北西の国イリシエンである。

国の北部は険しい山脈が広がっており、西部には雄大な海が見える。  
父ゼラードが統治する都は中央王都の北部で、俺達の根城はそこか  
ら更に北部、つまり山の麓にある。

ウチの一賊は1000人に届くか微妙な所に対し、敵は4500を  
越えるとも言われている大勢力…何かしら策を弄すしか勝ち目は無  
い。

「よう、大将、戦の匂いがするなア」

「丁度いい時に帰ってきたな、カイゼル。これから対餓狼旅団戦の  
軍議だ。あんたも参加してくれ」

カイゼル、28歳。

その性質状、若い者が多い一賊の中では兄貴分の様な男だ。

三年前、つまり俺がまだ10歳の頃、立ち上げたばかりの一賊に最  
初に喧嘩をふつけてきたのがこの男が率いる賊だった。

たしか遊廓から出てきた所を落とし穴に嵌めて、10歳前後のガキ  
が寄ってたかつて袋叩きにしてた記憶がある。

まあ、ぶつちやけ1000人中400人は彼が連れてきた野郎共だ。

「くつくつ、餓狼旅団つたらよう、お前、イリシエンでも屈指の山賊じゃねえかア」

「うん？か怖いなら帰ってもいいんだぞ？」

「おいおい、勘弁してくれよう。あそこの頭には散々コケにされたんだア。頭は俺が斬るぜエ」

「ああ、いいだろう。その前に作戦会議、だがな」

カイゼルは馬鹿じゃない。

酔って落とし穴には嵌まるが、戦時の勘は鋭く、判断も速く正確である。

なにより、その剣、槍、弓、その他あらゆる武術の才能が桁外れだ。元々は騎士の出自らしいが、それが何故たかだか13歳の悪ガキに従っているのか、俺にはよく分かっていない。

「確かに俺は強いさア。まあ、お前さん程じゃなかった…それだけの話さア。」

魔法を使えば勝てると思うが、剣と剣で打ち合っても、まだ勝てない。

彼は俺の、いや、一賊全体の武の師範とも言える存在なのだ。

数分後、複数の足音が幹部達の到着を告げた。



## 第2話（後書き）

うにに、ヒロイン出てこない…  
てかここまで女の子0人…むさい

### 第3話

そして時は流れ、ルイシエン18歳の秋を迎える。

\*\*\*\*\*

王が死んだ。

今回の王は先王よりもさらに愚鈍な、まだ子供の王、ケーフン。

「鶏糞は傀儡だ」

「鶏糞じゃなくケーフンなんだけど、似たようなもんか」

鶏糞だろうがケーフンだろうが関係ない。

問題は傀儡だつてことだ。

つまり先王の時代に金で得た宰相の位を持つ屑の娘と先王との間に生まれた子、それがケーフン。

宰相とその一族が政権の全てを握った事になる。

この時、ルイシエンの一賊は半年で約5倍の餓狼旅団を傘下に収め、その勢力は留まることを知らず巨大だった。

黒地に獅子を描いた旗を掲げた一賊は”黒獅子旅団”と呼ばれていた。

本拠地は北の大山脈の麓にあり、すでに一つの街となっている。事態を重く見た国は軍を派遣してきたが、禄に訓練もしていない兵に勝ち目はなく、忠誠心の薄い兵は黒獅子旅団に吸収される始末だった。

「おや、あの馬車は…ルイ、君の家の家紋だね。お父上かな？」

\*\*\*\*\*

「ルイシエン！早く、賊を解散して家に帰ってこい！先王の代ではよくして頂けていたが、このままでは我が家は潰されてしまうのだぞ！」

そんな事だろうと思った。

今、ヨジエワール家は一族存亡の危機にまでなっている。

原因は無論、この俺にある。

「父よ。既にして我が家はヨジエワール家に在らず、此処黒獅子旅団にある」

「ルイシエン…お前が大義を抱いていることは知っている。だが、この賊でどう今の世を正そうと言っただい！？」

王を誅殺し、お前が王になるとでも！？

そんなことでは民は誰一人として納得しない！！

あのような愚王でも、王家の威光は確かにあるのだ！！」

「俺なら、ユアンを王に立たせる。あれは聡明で、民を重んじる」

ユアン 16歳

父の妹と先王との間の子である。

ちなみに父の妹はすでにケーフンの母に毒殺されている。

「だが、ユアン王子は…どこかに幽閉されていると聞くぞ」

「大体の目処は付いてる。発見、保護した後はユアン殿下こそ王位を継承すべきと主張し、軍を挙げ、中央王都に進軍すべきだ」

「その前に宰相一族に北部領を取られてしまうぞ…」

「断固抵抗しろ。ここが正念場だ、父上。

ここを耐えきれば我が国はガラリと変わる。

無能は城から消え去り、真に忠誠心があり、才ある者が官職を得る、自然な形の国に…」

そのためにも、この賊、いや軍は絶対不可欠であろう。

鶏糞なんぞは畑の肥料にするしか使い道はない」

確かに黒獅子旅団は強い。

国の正規軍などまるで相手にならない程である。

だから、ゼラードは賭けてみることにした。

親不孝で飛びつきりの不良の、しかし、たった一人の愛する息子に。

第3話（後書き）

ううん、ねむいてんかいはやい



## 第4話

北部を我が領に” 鷄糞一族”

幽閉された王子を探す会” 黒獅子旅団”

\*\*\*\*\*

「まだ北部はどうにかならんのか？」

「宰相閣下、北部の領主は頑なに動こうとしません。  
また、領民にも慕われており…っ！」

どべし！

鉄扇を振るわれた軍隊長が膝を折る。

「そんな事は聞いとらん！

王の勅命を無視する貴族なんぞに価値は皆無だ！領主の屋敷ごと焼き払え！」

「はっ！」

兵の宿舎に戻った軍隊長は、5万の兵を引き連れて北部に進撃。中央領と北部領の境にある村にて、ついに、ケーフン王を掲げる正規王国軍とユアン王子を掲げようとする正規王国軍から離叛した北部軍との戦端が開かれる事となるだろう。

\*\*\*\*\*

「いいか！相手はここ何十年も禄に仕事もしてねえ雑魚ツペ野郎共だ！

俺達、北部の厳しさと共に生きてきた精強たる軍に適うハズがねえ！軽く捻り潰してやるうぜえ！！！」

うおおおおおお！！！！

楽勝だぜえええ！！

奴らの装備丸ごと剥いでやんよ！！！！

団長ー！抱かせてくれー！！

よし、気迫は十分だ。

最後に可笑しな声が聞こえたが気のせいだと信じたい。

正規軍は5万か。

対する北部軍は1万5千、黒獅子旅団を含めると2万3千といったところか…。

村は敢えて素通りさせ、その次の砦で迎え打つのが最上だな。

皆なら防戦の俺達に圧倒的に有利に戦えるだろう。

しかし境界の村は…正規軍に略奪行為をされる事になるだろうが。

「カイゼル、軍を率いて砦に迎え！」

ジェイク、ジェガンはカイゼルの補佐だ！

ライズ、それとリリーとセルフィは俺と引き続き王子搜索だ」

「了解したぜ、大将オ！」

野郎共！！行くぜエ！！」

うおおおおお！！！！！！

しかし暑苦しく奴らだ。

魔導隊の連中は付いていけてるのだろうか

心配になってくる。

黒獅子旅団は現時点で約8000人規模にまで膨れ上がっていた。

そこまで、この国は落ちぶれてしまっただけという事なのだろう。

旅団の内にも役割があり、各自に合った兵役をしている。

まず主力の4000の歩兵隊と2000の騎兵隊

それに遠距離からの1500の弩弓隊

僅かばかりだが魔導の才を持つ150の魔導隊

そして魔導隊よりもごく少数だが空を飛ぶワイバーンを駆る50の  
竜騎隊

それぞれに隊長、副隊長を付け、指揮させている。

カイゼルは隊長、副隊長に指令を飛ばす軍隊長である。

旅団の連中には將軍などと呼ばれているようだ。

「よし、行くぞ。俺達がユアン殿下を探し出さなければこの戦は終わらない」

大義名分を得なければ、こちらからは攻め入ることすら適わないのだ。

「しかし、あらから匂うところは探し尽くしてしまったじゃないか。実は皇后共々毒殺された後だっりして」

ライズが囁く。

まだ一カ所、匂う場所が残っている。

不浄の森、幽閉された王子。

そんな噂話だが…。

「ライズ、ユアン殿下が即位なされたら今の言葉を伝えておくわ」

そんな事を言うのは姉御肌なりりーだ。

長い赤髪に切れ長な赤い瞳を流してライズの耳元で囁く。

真つ赤な顔で反論しだしたライズを見て、からからと、紺色の眼を細めて、少女のように笑うのはセルフィ。

水色の長髪を背中ของ当たりで縛っている。

「お前ら、遊びに行くんじゃないんだぞ」

と俺が諫めてもセルフィが間の抜けた声で、はい、と返事をするだけだった。

メンバーを間違ったか、俺。



## 第4話（後書き）

あああ、白衣の天使が書きたい。  
でももうちょい我慢。

でも設定はあるので紹介だけ

と、いうことで今更ながらキャラクター紹介をば

ルイシエン＝ヨジエワール（18）

本作の主人公

イリシエンで最も位の高い公爵家の血筋を継ぐも賊の頭目になる。

金髪碧眼で女の子っぽい童顔を本人は気にしている

絵本に出てくる王子様の様な顔して悪党

サクラ＝サカモト（16）

日本人、坂本 桜

今時珍しい黒髪の和風美人

ルイシエンの世界では黒髪は希少

実家の手伝いと称して看護婦さんの服を着て患者さんの心を癒やしているらしい

性格破綻者ではあるが魔法的にテンプレ通りの能力を持つ

## 第5話（前書き）

ここまでプロローグでした。

えっ!？

つまり女の子が出て来ないと物語は始まらないのです!!

## 第5話

捕らわれの王子  
追われ者の黒獅子

\*\*\*\*\*

不浄の森

その名の通り不浄な障気が森一面に漂っている。  
この障気の中では教会の伝える聖なる精霊のお導き、所謂精霊魔法は使えない。

「まあ普通に自力で魔力練って放つ魔法は使えるんだがな」

精霊と同じく、人間でも気合いと根性で魔力を練れるというのが俺の持論である。

「あう、そんなの使えるのルイ様だけですよう。セルはこんなところじゃ無能もいいところですよう」

「あらあら、セルフィから精霊魔法を取っても”愛嬌”が残るわよ」  
「？」

「いや、せめて剣術とか残せよ」



うん、やはり、この三人は退屈しない。  
共に旅をする仲間としては最適であろう。

「それよりもライズ、思い出さないか？」

「ああ、丁度、俺もそう言おうと思ってたんだ。いやあ若かったなあ……あの頃は」

そう、俺とライズは以前二人でこの森に入った事があった。

「あの頃はよ、お前の事、女だと騙されてたよ」

俺は騙してない。

こいつが勝手に勘違いしてただけだ。  
それに気付いてて面白そうだから黙ってたのが騙してると言われればそれまでだが。

「えー！ルイ様とライ君の二人で！？」

そこで二人の愛情は芽生えたのっ！そうに違いありません！

この女は黙ってれば妖精ように可憐なのに、脳内は腐っているのだ。

「それじゃあ、今回は私とセルフィの愛が芽生える番ね」

そしてこの女は遊廓の女共の数倍は艶やかで美しいのに、こんなだし。

「……セ、セルはそっちの趣味はないですっ。

それよりルイ様とライ君の馴れ初めが聞きたいなっ」

必死に話題を逸らすセルフィだった。

ま、たまには昔を振り返ってみるのもいいだろ。  
今まで散々、未来しか見つめずに生き急いできたのだから。

\*\*\*\*\*

ルイシエン＝ヨジエワール  
7歳の春

「ルイーちゃん、あーそーぼー」

ライズ＝アツサム 8歳

「きみ、しつこいのですよ。おれは父上の本をよんで、勉強してるのですよ」

「ルイちゃん、なんで女の子なのおれ、なの？  
勉強なんかより、体うごかしたほうが楽しいよ！今日は不浄の森をたんけんしよ！」

そう言われてルイシエンはピクリと反応する。  
不浄の森

精霊の立ち入れない程の障気を放ち続けていると、父の本に書いてあったのだ。

「そんなところ入ったらいかんのですよ。教会にばれたらお説教、ですよ」

「ルイちゃんは真面目だなあ。バレなければいいんだよ！こっそり行って、こっそり帰ってくる。これでいいんでしょ？」

ライズが不真面目、というかやんちゃすぎるだけなのだが、好奇心旺盛なルイシエンは行ってみたいと思いはじめていた。

「ホントに仕方がない奴なのですね。でもバレた時はライ君にむりやり連れてかれたって言いますからね」

「そっこなくつちゃ！」

途端に目を輝かすライズ。

子供は実に単純明確なものである。

不浄の森

「うっ、けっこう、ふんいき、あるね」

「怖いんですか？なら帰ってもいいのですよ…」  
役立たずめ（ボソッ

「いや、いやいやいやいや、こんくらい全然怖くないよ！兄上から  
パクってきた剣もあるんだ！さあ行くこうか！」

2時間後…

「ルイちゃ、こじこじ」

「知りません」

迷子だった。

更に2時間後

「ひっく、ひっく、ぼぼ、まま…」

「うるさいのですよ。まっすぐ歩いてれば外に出られるはずですよ」

泣いていた。

更に2時間後

「うっ、う、ひっく、ルイちゃ、もうまっくらだよ。ぼくたち、こ  
こでしんじょうのかな？」

「一人で死ぬといい。私にはまだやることあります。こんなと  
ころで死ぬはずがないのです」

詰んでいた

それから三日後の夜

「ルイちゃん、おなかすいた」

「自分の足でも焼いて食べればいいのですよ」

「それじゃあ、歩けないよ」

そんな事を言いながらフラフラと歩く少年二人。

ガサガサ ザワザワ

「っ！な、なんかいるよルイちゃん」

「魔獣でしょうか？」

「グガオオオオオ！！」

冒険者ギルド

Eランク指定モンスター

ルーグルⅡラビットが現れた！！

草食系モンスター

凶暴性は皆無で非常に温厚な性格だが、逃げ足だけは速い。その肉はとろけるような柔らかさと独特の香りがして美味。また愛らしい姿をしているので愛玩動物として飼育されていることもある。

「嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ嘘だっ！！！！  
こんなのがルーグル＝ラビットだなんて、絶対におかしいよおおあ  
ああああ！！！！」

## 第5話（後書き）

仕事の合間にちまちま更新しますた。  
次でいよいよヒロイン登場です。  
きっと愕然とします。悪い意味で。

ライズ＝アッサム

19歳

ひよろりとした長身だが筋肉は付いている。

茶髪に薄桃色の眼なんかかわいいね

ルイシエンの幼なじみで過去を知る人物、という点に置いて一目置かれてる。

ルイシエン目当ての女性団員や男性団員（？）によく質問されてる光景を見る。

纏う雰囲気がかつぽいけど意外と頭がいいのはルイシエンに軍略を叩き込まれたから。

主に槍を使って戦う、歩兵隊の総長。

カイゼル＝サードレンシア

33歳

南東の没落貴族の出身。

そのため、南東訛りがひどい。

黒獅子旅団の兄貴的存在で、武術の師範、そして軍隊の総司令官。余りにも彼に権力が集中したため、実質的なリーダーは彼なのではないか？という声も多く挙がっているが、彼はこう言う。

ルイシエンは黒獅子旅団という国の国王である、自分は聖騎士にして將軍なのだ、と。

聖騎士、王に忠誠を尽くし守る

將軍、王に仇なす敵の悉くを滅ぼす

確かに自分は全ての軍隊を動かすことを許されているが、それは黒獅子旅団の象徴、団長ルイシェンの意志を代行しているだけだ、と。

そもそも黒獅子旅団というのは既にして一つの街になっており、それなりに発展している。

領主たる団長の仕事の殆どは内政になってしまっているのだ。



## 第6話

ちびっこ死神は今日も首を狩る  
馬鹿は死んでも治らない

\*\*\*\*\*

そだ！うそだ！うそだ！  
こんなの絶対おかしいよおおああああ！！！！

少女はその奇声を聞いて目を覚ます。  
黒い毛皮を纏った少女の身のこなしは、正に獣そのものだった。

「……………うるさいなあ、安眠妨害は首ちょんぱの刑つての、この森の常識なのになあ」

なにやら物騒な事を呟きながら右手に魔力を注ぎ込む。  
そして顕現したるは少女の背よりも長い、まるで刀のような刺身包丁。

「さて、今日も今日とて、首狩りごっこの始まりだあ〜！  
どこか壊れてしまったような陽気な声と目で、森を獣の様に木から木えと飛び移って目的地（処刑場）へと向かって行く。

\*\*\*\*\*

「ルーグル!!ラビット、お前のなきごえはグガオオオオ!!じゃなく、きゅうん、だろぅが!!!!」

そう言って兄から借りてきたというショートソードで斬りつける。

「わぁ、どうしたのです?いきなりやる気まんまんなのですね」

「ぼくはわすれはしない!ルイちゃんと二人でそうげんでルーグル!!ラビットをぐうぜん見つけ、ひっしにつかまえて、二人でかわいがったあの日のことを!!ルイちゃんもルーグル!!ラビットもかわいかったんだああ!!!!」

これは重傷だ。

もうだめかも。

完全に暴走中なのですね。

しかしライズの全力の一撃も巨大ルーグル!!ラビットが軽く身を動かしただけで見事に受け流される。

そしてくるんと回転、尻尾叩きつけ!

「グヘッ!ヴフワアアア!!!!」

直撃。

軽く10メートル以上吹っ飛ばされて大きな木に激突。

「ライ君ー！」

急ぎ駆けつけるも、その姿を見ると絶望的になってくる。

頭は辛うじて無事だったが、胴体部分はまるで爆発したかのように色々ごちゃごちゃになっていた。

「ライ君、死んだら駄目、なのですよ。ライ君が死んだら、釣りも戦盤も駆けっこも、チャンバラも出来なくなってしまうのですよ…！」

「…それ、ぜんぶ、ぼく、まけたよね…ぐふっ」

「ライ君ー！ライ君ー！」

「げほっ、げほっ、ふ、うれし、いな。こんなぼくなんかの、ために、ルイちゃ、がないて…」

ルイちゃ、さいごに、つたえたい、こと…ごほっごほっ」

「ライ君…うっ、ひっく、なにです？うっ、らいくん」

「…だ、い、す、き……」

「ら、ライ君ー！ー！ー！ー！」

おれもね、きみに伝えなきゃいけないことが、あるのですよ……！  
おれ…じつは…

……………男、なんだ……………」

沈黙

その沈黙は今までの何よりも重く、ルイシエンにのしかかる。死人は喋らない。そんなこと、聡いルイシエンには分かっていたことだったのに、涙が止まらない。

「……………えっ、おとこ？」

「……………えっ？」

「……………いや、えっ？おとこ？」

「えっ？う、うん、おれ、男だよ？」

「アツ……………!!!!!!……………」

ライズ＝アツサム

この日8歳の春が終わりを告げた。

\*\*\*\*\*

だが、そんなこと（笑）は関係なしに物語は進んでいく。  
来るべきエンディングに向かってー

「やあやあ、空気を読まずに失礼するよ。

ついさっきの話なんだけど、

こんなのぜったいおかしいよおおああああ!!!

とか言ってた近所迷惑、睡眠妨害な屑はどっちかな？

こっちの聡明そうな可愛らしいお嬢さんかな？

それとも、こっちの少しアホっぽいお坊ちゃんかな？

うん、君だね。既にして死にかけてるけど、間違いなく。でも一人

残すのも失礼だし…仲良く一緒に逝きたいよね？うんうん！そうだ

よね！そうに決まってる！じゃ、そゆわけでー

……サヨナラ」

言い終わるや放たれる濃密にして圧倒的な殺気。

当然の事ながら戦場にも出向いた事のない少年二人が、これほどの  
殺気を自分に向けて放たれるのは始めての経験だ。

まさに背筋が凍って何も、口を挟む事さえ、出来ない。

だが……

「グガオオオオオ!!!」

まさに死神の鎌が首を浚おうとした、その瞬間だ。

自分の獲物を横撮りされそうになっていることに気付いたルーゲル  
「ラビットが吠えたのだ！」

「…う、る、さい」

一閃

ゴロリとこるがるのは愛嬌などどこかに忘れてきてしまった狂兔の首。

「はあ、なんかもう、お腹すいた。  
今日は兎の丸焼きね。」

じゃ、ばいばい。早く帰るのよ、わたしの気が変わらない内に、ね。  
クスクス、今日から兎には感謝して生きなきゃ、ね？クスクス……」  
た、助かった、のか……  
生きた、心地がしなかった。

「あの、ぼくも、うさぎのまるやき、食べたいな」

「えっ？」

「……えっ？」

## 第6話（後書き）

あああ、狂ってるもうキャラが全体的に狂ってる

リリースレンダーヘヴンアークスⅡレムレム  
年齢不詳

名前が圧倒的に多い。世界一名前（性ではなく）の長いギネスに挑戦すべき人物。略してリリー。だれにも本名を覚えて貰えない悲しき定め。作者すら覚えてない。

謎の多い団員だが団長からの信頼は厚く、獅子旅団の暗部こと諜報部隊の隊長を勤める。

使用武器は短剣、ショートソードなどを金属製の紐、所謂ワイヤーで繋いだものを使う。

攻撃範囲が広く、かなり変則的でも使い手が彼女とあつては攻略は不可能とも言われている。

だが魔法には弱く、焼いて熱伝導、感電させる、という手も使える。異様に器用な彼女はその位の対策はしていそうなのだが。

三度の飯より可愛い女の子が好きという人。

その美貌は遊廓の女共も裸足で逃げ出すとかなんとか。

ポーカーフェイスで表情から感情の変化が全く読み取れない。

賭博では団長ルイシエンを除くとほぼ最強。

現在はセルフイを狙っているらしい。

セルフイⅡハートーツン

16歳

若手女性団員として現在人気絶好調のアイドル的存在。

だがその脳内はアツい事になっているのはあまり知られてはいない。夢を見ていましょう。その間は幸せです。

精霊魔法の使い手で水の精霊、風の精霊と契約を交わしている。

また、弓も多少使えるらしい上により料理上手でもある。(弓と料理になんの関連性が!?)



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7208y/>

---

漆黒の騎士と白衣の天使

2011年11月21日23時59分発行